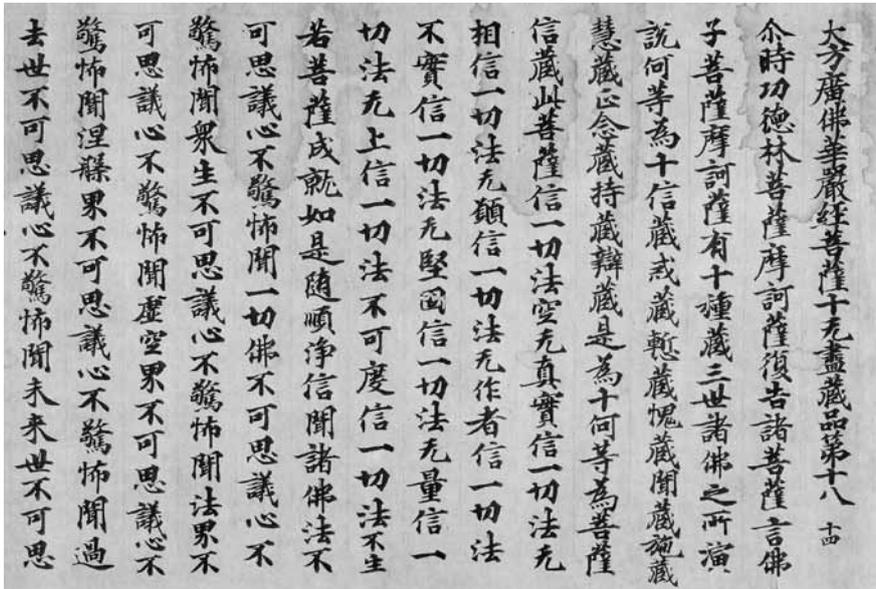


# 大方広仏華嚴経卷14の写し手

すみよし ともひこ  
住吉 朋彦  
(斯道文庫教授)



図版 1

慶應義塾図書館の蔵する古写経の尤品、大方広仏華嚴経（60巻本。以下、華嚴経）巻14について、その正確な書写年時と写し手が、新たにわかった。この華嚴経の経巻は、宝亀6年（775）5月頃、五百木部真勝により写されたのであった。真勝は、奈良時代後期に活躍した写経生の一人で、図版1の美しい墨蹟が、その手に成ったという事実には、強い納得感がある。

これに従い、平成19年（2007）に丸善丸の内店で開かれた貴重書展示会「義塾図書館を読む ～和・漢・洋の貴重書から～」の図録に載せた筆者の解説に、訂正の必要を生じた。

当時この経巻が、宮内庁正倉院事務所で管理する「神護景雲二年御願経」（以下、神護景雲経）と一連であることを見出し、称徳天皇の神護景雲2年（768）に写されたものと推定した。この認定の前半は、今回益々明らかになったが、その後半は正さなくてはならないのだ。いささか弁解めくが、以下にその経緯を説明してみたい。

正倉院の神護景雲経は、東大寺尊勝院の聖語蔵に

伝わった一切経（仏教經典の集成）の一つで、恵美押勝の乱を退けた称徳天皇が、平穩を願ひ造らせたもの。造作の趣旨を述べた神護景雲2年（768）の奥書をもつことから、その名がある。しかし、肝心の奥書がある巻は非常に少なく、一方で聖語蔵には、同様の書式をもつ経巻が多かったため、経巻を引き継いだ正倉院事務所では、もともと全ての巻に奥書はなかったと解釈し、経巻の特徴から整理を加え、神護景雲経を再構成した。

ところが、近年の「正倉院文書」研究の進展により、称徳天皇の晩年から、次の光仁天皇の宝亀年間にかけて、宮廷の「奉写一切経所」において、6度も一切経書写の行われていたことがわかった。しかも、いわゆる神護景雲経の中に、その内、4種の含まれることが、明らかとなってきた。

この研究を大きく前進させたのは、宮内庁正倉院事務所の飯田剛彦氏で、氏の研究に従えば、問題の華嚴経は、「正倉院文書」に「今更一部」と標記された、宝亀年間（770-80）作成の一切経の一部に当たるといふ。どうしてそのように特定できるのか。

その説明には、正倉院文書という特殊な文書群の性質について、述べて置く必要がある。

正倉院文書とは、正倉院の中倉に伝わった、奉写一切経所という機関の行政文書を中心とする、歴史的資料群のこと。この資料群は、8世紀奈良の役所の様子を生々しく伝える、特異な内容を備えていた。

奉写一切経所（以下、写経所）とは、天皇や皇后の意志に応じ、大小様々の写経事業を行った機関で、東大寺に置かれた。そこでは、経師と呼ばれる写経生や、校生を雇って組織的な写経を行い、仏教信仰を支えとする国家経営の一翼を担った。写経所関連文書の内容は、それぞれの事業ごとに必要となる経巻（親本）の準備、紙や墨、筆や装具など物品の調達、経師の作業報告、休暇願から、果ては布施（給料のこと）の前借りに及ぶ。

さて、神護景雲から宝亀年間にかけては、関連の文書が殊に多く、事業の様子が細かに知られる。特に「手実」という、経名や巻数、具体的な年月日を書き上げた作業報告書兼物品請求書が、書類を貼り継いだ巻物「手実帳」の形で保存され、写経の様子を詳しく伝えている。

さらに、実際の経巻にも、断片的ながら文書の記事と合致するような特色が見られる。例えば、草木染で造られた表紙や、本紙の張数など。当時は現代にも増して紙が貴重で、使った枚数はきっちり記録された。また偶然に残った奥書は特に重要で、経巻の一番奥、軸木に貼り継いだ紙の背面に、経師の名や、校正に当たった人物の名が記され、切られずに残った場合がある。これらの経巻の書誌と文書の記事を、総合的に照らし合わせていったのが、飯田氏の研究だ。

飯田氏は、奥書のある経巻を整理、それらの筆跡を比較し、同じ人名や経巻名を含む手実を探し出し、該当の経巻を確かめることにより、奥書のない多くの巻の写し手をも、明らかにして行った。そうして、図版2の手実（「正倉院文書」続々修第22帙3）の記事により、華嚴経の巻11から20の第2帙は（10巻1帙、当時の写経の分担は、1帙を単位に行われた）宝亀6年（768）5月に五百木部真勝という経師によって写されたことが、突き止められた。これは、書誌学と古文書学の協働による、目覚ましい成果と言える。

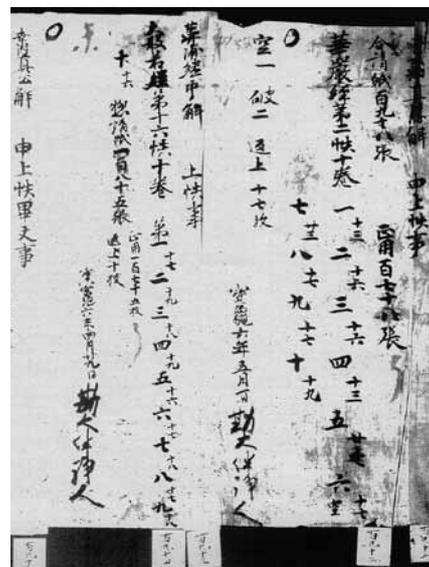
義塾図書館所蔵の巻14も、この中に含まれていた

はずだ。念のためもう一度、図書館貴重書室を訪ね原本を確かめてみたが、手練れの経師真勝による力強い筆跡と、確かに認められ、紙数も手実の通り、ちょうど13張あった。

そうしてみると、この経巻は、正倉院事務所の認定する「神護景雲二年御願経」の一部であって、しかし神護景雲2年より、7年ほど後の写本であったことになる。

ひょっとして真勝の奥書はないかと、巻軸部の紙背を覗こうとしたが、残念なことに後の蔵書家が、最後の料紙を、軸に巻いた形で貼り付けてしまい、肝心の箇所を確認することができない。文字がないから貼ったのであろうけれども、何とももどかしい気持ちになる。しかし今回は、書写事情の判明という成果に満足して、保存と調査を両立する技術の登場に期待し、この秘密は将来に残して置くこととしよう。

なお、飯田氏や筆者の研究が行えるについては、陰の主役が他におり、丸善社が世に送った、カラーデジタル版「宮内庁正倉院事務所蔵聖語蔵経巻」の存在が非常に大きい。この出版は、ふだん正倉院の研究者も自由に見ることのできない「聖語蔵経巻」を、精細な画像により網羅的に複製する大事業で、一級の資料を研究する手掛りが初めて提供されたことは、大きな福音であった。現在義塾図書館には「神護景雲経」の部分がなく、他所へ拝見に赴かなければならないのではあるが、最後に、その出版の功績を銘記して置きたい。



「五百木部真勝解 申上帙事」

図版 2